GLOBE Voice

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2013 Number 8

東京外国語大学

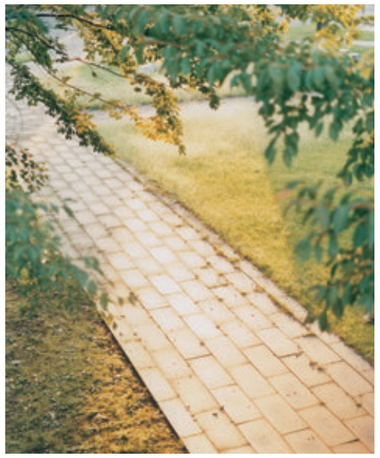
学内競漕大会100回目の扉開く。 日英同盟が締結され、シベリア鉄道がほぼ開通した1902年――。東京外大の「学内競漕大会」が始まった。歴史を積み重ねた同大会は2013年5月29日、記念すべき100回目を迎えた。舵を取るコックスのコールに従い、全員が息を合わせてオールを漕ぎ続ける。時代は違えど、その熱き戦いはこれまで数々の“ドラマ”を演じてきた。

文・グローブヴォイス編集室　写真・公文健太郎／竹井俊晴

特集 交わるこころ

GLOBE Voice
2013 Number 8

2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。東京外国語大学の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。8号目となる今号は、1902年から続く伝統行事、学内競漕大会を特集しました。



写真・市橋織江

Contents

交わるこころ ――3

学長対談 ――8
元国連事務次長 明石康氏

graduated active person in society ――14
団体職員 家形晶子
会社員 服部貴志江

person doing research ――16
中山俊秀／宮田敏之／西岡あかね

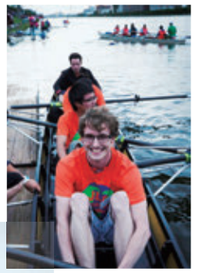
コラム「聴」――22
丹羽京子／中野敏男／高垣敏博

歴史を刻む在学生 ――26
国際協力専攻 モハメド・オマル・アブディン

News ――28

絆

「ボートは初心者でしたが、仲間と一緒に必死で漕ぎました」「東京外大は他言語、他地域の学生と交流する機会が少ないので、貴重な経験ができました」「この大会をきっかけに結束力は高まると思います」「留学生日本語教育センターで日本語の勉強をしています。レースはタイミングが大事。距離は長く感じましたが、留学生が参加できるのはうれしいですね」



レースであるとともに、言語や地域を超えた交流も活発に生まれた学内競漕大会の一コマ。勝敗に一喜一憂する姿も見られるなど、円陣を組み、気合いも十分。留学生チームはオレンジ色のTシャツで統一して参加した。

垣根を越えて〝外語大魂〟が宿る

東京外大に入学した新入生たちが熱戦を繰り広げる「学内競漕大会」は、1年生の大半が参加し、交流を図る。それぞれの専攻語・専攻地域の学生たちの絆が深まる大会でもある。レースは5人乗りのボートで、300メートルのコースを漕いでタイムを競う。体力、気力、ペース配分、そして全員のタイミングが重要なのだ。

ボートに乗る出場者5人の思い。

河岸で必死に声援を送る仲間たちの姿。スタートの合図を待つ直前は、全員の心が一つにつながる瞬間だ。前回の99回目の大会から本格的に留学生たちが参加するようになり、国を超え、地域を超え、そして言語を超えた思いが重なる。

100回目を迎えた歴史ある大会は2013年5月29日に開かれ、戸田公園漕艇場に今年も新たな〝外語大魂〟が宿った。

「レースには出ませんでしたが、専攻で揃いのTシャツを着て、河岸を走って応援しました」「国旗を振って盛り上げました。顔のペイント？　もちろん、専攻語の国旗です」「ゴールした瞬間、思わず周りの人たちとハイタッチして喜びを分かち合いました」「みんな真剣ですが、同時に楽しんでいる。OBとしては、その光景を見るとうれしく思いますね」

楽

国際色豊かに笑顔の花が咲く

学内競漕大会では、学生たちが各々の表現方法で大会を楽しむのも特徴の一つになっている。

100回目となったこの日の大会には、応援も含めて1年生約800人のほぼ全員が参加。約600人いる留学生からもチームが編成され、国際色豊かに。顔に国旗をペイントした学生。赤や青色などそれぞれの専攻で揃えたTシャツを着た学生。そして、その胸には専攻語が記されている。全身タイツの男子学生や、カニやタイの被りものをした女子学生など仮装した学生たちも登場し、大会を盛り上げた。

レースが始まると、懸命に応援し最後まで声援を送る。惜しくも敗れて悔しがる姿や、仲間のチームの健闘にハイタッチで喜び合う光景など、大会はさまざまな人模様が描かれる場でもある。

揃いのキャップに揃いのTシャツ、仮装した学生も登場し、大会に彩りを与えた。勝利を喜ぶ姿には楽しさがにじみ出ている。「ヨシ！」とガッツポーズを見せつつも、笑顔は欠かせない。

伝

「昔の記憶が一気に蘇りますね」

ある60代の卒業生は感慨深げに語り、視線を会場へと向けた。

100回目の記念大会となったこの日は、端艇部のOBをはじめとする多くの卒業生たちも集まった。18歳から上は70歳以上まで、伝統ある大会は幅広い年齢層が支えている。

第1回大会が開かれたのは、1902年。当時の会場は現在の戸田公園漕艇場ではなく、吾妻橋付近の隅田川を舞台に1100メートルのレースだった。東洋組と西洋組に分かれて選手が競い合う「ハイカラな語学校」のボート大会の様子は、ニュースに取り上げられるほどの人気で、多くの人たちから熱視線を浴びていたという。04年、「Foreign Languages School」の頭文字からF組、L組、S組の3組対抗レースとなり、07年の第6回大会では、大優勝旗が作られるなど、学内の重要行事として発展していった。

とはいえ、レースの主役である1年生たちは大半がボートの素人。それを支えるのが、端艇部の部員を中心とした上級生たちだ。彼らがコーチ役となり、実際にレースに出場する新入生の勧誘やボートの指導という役目を担う。

大会を終えると、コーチ役はその弁を端艇部の機関紙『コンコルディア』に寄稿することが恒例になっている。

昭和初期の頃の学内競漕大会の様子。
圧倒的に男子学生が多いのも時代の象徴。
負けて悔し涙を流すなど、
勝負は真剣そのものだった。
写真左は、大会の様子を伝える端艇部の機関紙『コンコルディア』。

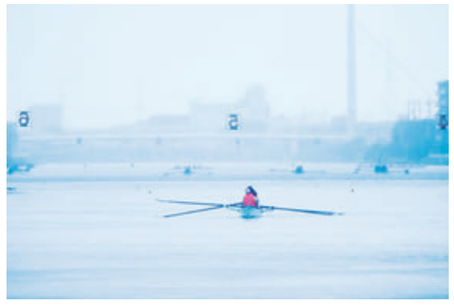
「100回も続いている大会と聞いて驚きました。これだけ続く学内の大会って、珍しいのではないかと思います」「久しぶりに見学しましたが、当時の記憶が鮮明に蘇ってきました。普段は思い出さなくても、それだけ心に残っていたということなんでしょうね」「学生のボート大会で、戸田にこれだけの人が集まるのは『学内競漕大会』くらいじゃないですか。他大学が羨ましがるほど活気にあふれているんです」「学内の正式な行事ですが、運営は端艇部をはじめとする学生が主体となって行っています。教職員はあくまでサポート役の大会なのです」

中断時期を乗り越えて

ここに紹介するのは、1941年6月17日発行の『コンコルディア』から抜粋したものである（表記は原文のまま）。

〈『白紙の状態でオールを握る敵味方、力量技量がそんなに違ふ筈はない、最后の勝利を決定するものは短い練習期間ではあるがその間にボートスピリットと云ふものを大体だけでも理解する事に依って生ずる頑張りである』（中略）併し結果は見事に私の豫想を裏切り、熟は力を征服せずに終つた。〉

こうした歴史ある大会も過去に3度中断した時期がある。1度目は明治天皇が崩御した1912年。2度目は43年からで、戦争の影響だった。復活したのは8年後の51年で、「戦後第1回大会」と銘打たれた。ただし、のちにこの大会は「幻の1回」といわれるようになる。戦後の混乱期に開催したので、戦前の通算の開催回数を引き継いでいなかったためだった。その後、学園紛争による中断時期もあったが、その伝統は確実に次の世代へと引き継がれている。



ピンクのTシャツ姿で大会を運営した、
端艇部を中心とする運動部の学生。
脈々と受け継がれていく伝統は
色褪せることなく、輝き続けている。
写真下はコックスを務めた立石博高学長。
参加できなかった学生時代へのリベンジ。

column

東京外語会理事　端艇部OB
渡邊悦男

100回目を迎えて

以前と比べて、随分と学内競漕大会は華やかになりました。これは女子学生の割合が増えたからだと思います。昔は1割程度しか女子学生はいませんでしたから。

大会は他の専攻といい意味での競い合いです。ボートには、「1漕あって1人なし」という世界中で使われる言葉があるのですが、これは1人が違うことをしたら、ボートは全く進まないという意味です。それゆえに絆が生まれるのです。実際、大会後はクラスのまとまりが良くなるといわれています。

前回の大会から本格的に留学生の参加が始まりました。実は留学生と日本人の学生との交流はそれまであまりなかったのですが、この大会がいいきっかけになるはずです。この大会のいいところの1つは、卒業後もいい思い出として残ること。100回目を迎えた伝統ある大会ですが、これからもますます発展していくことを祈っています。

学長 立石博高対談

「対話」の継続こそが世界平和をもたらす

ゲスト

明石康 氏

元国連事務次長

戦後、日本が国際連合への加盟を承認されたのは1956年12月18日。その日、ニューヨークの国連本部で、重光葵外相の加盟演説を見つめている1人の青年がいた。青年の名は、明石康。国連初の日本人職員となった紛争解決の専門家である。国連カンボジア暫定統治機構の事務総長特別代表としてカンボジア初の国民議会選挙を成功に導き、旧ユーゴ紛争の解決にも尽力。厳しい国際政治の現場で、平和構築に向けて陣頭指揮を執った。その経験を生かし、帰国後は日本の未来を担うグローバル人材の育成に取り組んでいる。世界に飛躍する人材とはどうあるべきか、明石氏の現場体験から見えるものとは――。

文・吉田燿子　写真・青木倫紀

あかし やすし

1931年（昭和6）、秋田県生まれ。東京大学教養学科卒業後、米ヴァージニア大学大学院修了。57年日本人初の国連職員となる。軍縮や広報担当の国連事務次長、カンボジアや旧ユーゴスラビア担当の事務総長特別代表を歴任。97年人道問題担当事務次長を最後に退官。現在、国際文化会館理事長、スリランカ平和構築及び復旧・復興担当日本政府代表などを務める傍ら、高校生のグローバル人材育成事業「明石塾」の塾長も務めている。

立石博高学長（以下、立石） 今回、改めてご経歴を拝見したのですが、明石さんは日本人初の正規職員として国連入りされたのですね。日本人第一号ということで、いろいろな希望や思いがおありだったのではありませんか。

明石康氏（以下、明石） いや、それほど立派な動機やビジョンがあったわけではないのです。

私は1955年にフルブライト留学生として渡米し、ヴァージニア大学大学院やフレッチャースクール（国際関係学の専門大学院）で学びました。56年の夏休みに、ミネソタ州で国際学生セミナーに参加したのですが、突然、「東アジアにおける国際関係について発表してくれないか」と依頼され、急に話をすることになったのです。このとき聴衆の中に、国連の政務局幹部のイギリス人がおりまして、どういう風の吹き回しか、私の話に興味を示してくれたんですね。

56年暮れには日本の国連加盟が承認され、私はフレッチャースクールの国連本部参観旅行に参加し、日本が国連に加盟する瞬間をこの目で見ることができました。その際、ミネソタ州で出会ったイギリス人や上司の政務局長から、「国連に応募する気はないか」と誘われたのです。当時の私は、将来は国際政治学者として教職に就きたいと考えていました。「国際関係の現場を経験してみるのも悪くはないだろう」という軽い気持ちで、国連に応募したのです。

立石 最近、国連についての興味深い新聞記事を読みました。「国際連合」という日本語訳からは、何か理想的な機関を連想させるけれども、英語名はUnited Nationsで、直訳すると「連合諸国」になる。国連はNationとNationの国益がぶつかり合う場であるという現実を、直視するべきだという内容でした。

このように、現代世界は国民国家としてのNationによって構成されていますが、その国民国家も、現実には多民族の要素を抱えています。第2次世界大戦後は、Nationと多民族・多言語との葛藤の中で、さまざまな紛争が続いてきたわけです。その中で明石さんは、40年にわたり国連で平和構築のために尽力されてきました。さまざまな利害がぶつかる状況で、どのように工夫しながら、紛争解決に取り組まれたのでしょうか。

文化人類学が国連で役立った

明石 私が大学時代に学んだコースの1つに、文化人類学があります。文化人類学では、各々の社会には固有の文化があり、それぞれが洗練された価値体系を構成していると考えます。異なる文化の間で優劣はつけられない、という相対主義に立つわけです。

こうした考え方を学んだことは、国連で仕事をする上で大いに役立ちました。国家と国家の間で起こったさまざまな問題を、できるだけ中立的な観点から仲裁・仲介するのが、国連で働く国際公務員の仕事。国と国との関係や、民族間の交流が活発になればなるほど、公正で普遍的な立場からものを見ることが重要になってくるのです。

立石 明石さんは92年に国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）の事務総長特別代表に就任され、自由で公正な国民議会選挙の実現に尽力されました。また、94年には旧ユーゴスラビア問題担当・事務総長特別代表となり、ユーゴスラビア紛争の収拾にも努力されています。

明石 カンボジアや旧ユーゴで心掛けたことは、「この国（人）は良い、あの国（人）は悪い」と簡単に区別しないことでした。そのためにも、まず相手が何を考え、何を望み、何を恐れているかについて、じっくりと耳を傾けるところから始めました。我々の仕事は、異なる立場の人々の意見をよく聞き、総合し、分析するところから始まる――その信念に従って、仕事を続けてきたわけです。

立石 文化人類学的な理解を持って、厳しい国際政治の現場に臨んでこられたということですね。ところで、カンボジアの場合は、イデオロギー的な対立が前面に出ていたと思うのですが、旧ユーゴの場合は、宗教や言語の違いによる摩擦が表面化したように思います。それぞれのケースに対して、明石さんはどのように向き合われたのでしょうか。

腹を割って話し合える関係を築く

明石 カンボジアの紛争と旧ユーゴの紛争との間には異なる点が多く、紛争に対する国際社会のキープレイヤーの態度もかなり違っていたように思います。

カンボジア国内には4つの派閥（シアヌーク派、プノンペン政権派、ソン・サン派、ポル・ポト派）があり、その背後にはさまざまな国の存在があったわけですが、20年間戦争と対立が続いたことに嫌気がさしていました。ちょうど冷戦が終結したこともあり、各派は「20年来の戦いにケリをつけたい」という思いで一致していたわけです。91年10月に成立したパリ和平協定に基づき、我々は平和の構築と新しい国造りに着手し、安保理（国際連合安全保障理事会）でも、5つの常任理事国が基本的なスタンスを共有しながら、カンボジア和平の実現に向けた決議を採択しました。

カンボジア4派のうち、ポル・ポト派だけは途中から反旗を翻しましたが、私はポル・ポト派のパトロンである中国の外相や外務次官と密接に協力しながら、国際社会の立場を固めていきました。

また、シアヌーク国王は非常に個性が強い人物でしたが、この人の支持を得ることが重要と考え、互いに腹を割って話し合える関係を作っていきました。国際社会では、平和の構築を妨害する人間やグループが出てくることがあります。そんな場合でも、できるだけ理解者を増やしていけるよう、丹念に努力を続けることが必要です。

カンボジアでは、93年の国

紛争解決のキーは、
まず相手の話に
よく耳を傾けること
――明石

国際的に活躍する
人材は「対話」の
中で生まれる
――立石

たていし ひろたか
1976年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業、78年東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻修士課程修了。同志社大学商学部助教授を経て、92年から東京外国語大学に在籍、2013年4月より学長就任。著書に『スペイン歴史散歩―多文化多言語社会の明日に向けて』（行路社）など。

東京外国語大学を「対話と共創の場」にしたい

——立石

民議会選挙を目指して交渉が続けられましたが、選挙をボイコットしたボル・ポト派の攻撃で選挙は失敗に終わるだろう、と世界中の新聞が書き立てました。しかし、我々はあくまでも冷静に、プロとして最善を尽くすという態度で臨みました。こうして、国連の監視下において、初の総選挙が実現したのです。

しかし、その次に赴任した旧ユーゴでは、やや事情が違いました。この問題に臨む国際社会のキープレイヤーの姿勢が、各者各様にバラバラだったのです。

当時、ユーゴは3つのグループに分かれていました。ボスニアを中心としたイスラム系勢力と、セルビアを中心としたセルビア正教徒勢力、カトリック教徒が多数派を占めるクロアチアを中心とした勢力が、三つ巴で争っていたわけです。

国際社会の立ち位置もバラバラで、アメリカはボスニア支持、ロシアはセルビア支持、ドイツはクロアチア支持、英仏は中立で国連と協力しながらやる、という具合でした。特に、NATO（北大西洋条約機構）による空爆の問題では、アメリカが空爆を強硬に主張しました。空爆実行にあたっては2つのキーが必要とされ、実際には、私とNATO軍総司令官の2人にキーが与えられました。私は、NATOによる空爆の可能性を、交渉のテコとして使ったわけです。

私が、大規模な空爆の実施に慎重な態度を取ったことで、アメリカは私を批判しました。しかし、ブトロス・ブトロス＝ガーリ国連事務総長は私の判断を信頼し、最後までバックアップしてくれました。そのために、ガーリは2期目の事務総長選挙の際、安保理15カ国中14カ国が再選を支持したにもかかわらず、アメリカの拒否権発動により退任を余儀なくされたのです。

立石　お話を伺っていると、国際政治の最前線で本当にご苦労なさったことが偲ばれます。

一方で、明石さんは群馬県で「明石塾」を開き、グローバル人材の育成に取り組んでおられます。日本では、今、どのようなグローバル人材が必要とされているのでしょうか。国連での長い経験を踏まえて、お聞かせいただけますか。

明石　最近、日本の若い人が国内の生活に安住してしまい、リスクを冒して海外に行くのを嫌がる傾向があるという話を聞きます。しかし、「グローバルな仕事をしよう」という意気込みを持った若者は決して少なくない。そういう人たちを勇気づけ、ポテンシャルを引き出すことは十分に可能だと思います。

政府のグローバル人材育成推進会議の報告書では、グローバル人材の育成にあたって重要なポイントを3つ挙げています。それは、「コミュニケーション能力」「やる気」「異文化理解」です。

「語学力」より「考え方」が大切

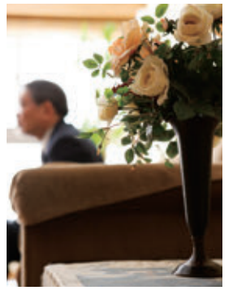
そのどれもが大切なことだと思いますが、私は特に「やる気」と「異文化理解」が重要だと考えています。「コミュニケーション能力」は確かに不可欠ですが、一般に考えられているほど難しいものではない。コミュニケーションとは、自分の考えや感情を相手に伝えるための道具であって、社会に対して開かれた「窓」のようなものです。この窓を開けるためのキーとなるのが語学力ですが、国連では、完全無比な英語やフランス語が話されているわけではありません。歴代の事務総長は中小国の出身ですから、お国なまりの英語で堂々とやっているわけです。しかしながら、考えていることや分析能力はずばぬけている。お国なまりはそれぞれの国のアイデンティティーであって、むしろ、しっかりした考え方を持つことこそが重要なわけです。

大切なのは、アイデンティティーとアイデンティティーが対話しながら、一つの総合的な考え方を創り上げていくことです。

その意味では、日本人特有のネイティブ信仰や完璧主義はかえって邪魔だと思います。話の内容をお互いに理解することが重要なのであって、それがどのような形で伝達されるかは二の次だと思うんですね。考えていることが本物であれば、それは何らかの形で通じる。正しい発音で話すことよりも、考えや思いを伝える熱意や誠意の方が大事だと思うのです。

従来の日本の教育は、先生が教える内容をひたすら学び、試験で吐き出すというスタイルでした。しかし、このスタイルは、複雑化する世界では通用しない。これからは、自分と意見の違う人の考えに耳を傾け、意を尽くして自分の考えを説明しなければなりません。とはいえ、相手の話をうのみにするのは危険ですし、やたらと雄弁になって相手を説得しようとしても成功しない。じっくり話し合うことこそが大事だと思います。

立石　おっしゃる通りだと思います。ひと頃、ディベートが非常に盛んになりましたが、ディベートとはもともと、「打ち負かす」という意味ですよね。



グローバル人材育成のポイントは「やる気」と「異文化理解」

——明石

明石　そうですね。ディベートは一種のゲームになりがちで、ディベートによって説得される人はほとんどいないと思います。大切なのは、ディベートではなく「対話」をすること。ダイアローグこそが、世界で通用する人材を育成するためのキーだと思うのです。とつとつとした表現でもいいから、自分の考えをきちんと説明し、相手の考えを理解するための注意力や配慮、想像力を育てること。それこそが、グローバル人材に欠かせない能力ではないかと思うのです。

立石　ありがとうございます。私は学長に就任したとき、任期中に実現すべき目標として2つのスローガンを掲げました。1つは、卓越した教養知識と専門知識を備えたグローバル人材を育成すること。もう1つは、東京外大を「対話と共創の場」にするということです。

学生と教職員が生活をともにし、相手の話に耳を傾けながら、じっくりと語り合う。そうした雰囲気の中でこそ、国際的に活躍する人材が育成されていくのではないでしょうか。この目標を実現するために、私も4年間の任期をしっかり務めさせていただきたい。今日、お話を伺って、本当に勇気づけられました。

明石　国と国との紛争や国境問題の解決には、たいへんな困難がつきまといます。お互いが冷静になって、相手の主張に耳を傾けながら、共通点を探ることによってしか、解決の糸口は得られません。グローバル社会で協調していくためには、問題点を率直に語り合い、共通点を見いだしながら、解決の糸口を探っていく以外にない。そこから、より平和で明るい未来が開けていくと思うのです。

その意味では、高等教育が果たす役割はきわめて大きい。OECD（経済協力開発機構）諸国の中でも、特に日本の高等教育は大きな曲がり角にさしかかっていると思います。大きな改善をぜひとも期待したいですね。

立石　本日は長時間、本当にありがとうございました。V

graduated active person in society_01

東京外大で得た宝物は、タフな仲間

家形晶子

アラスカシーフードマーケティング協会 水産業界担当マネジャー

米国アラスカ州は、サーモンなど、世界最高級のシーフードの産地として有名だ。そのプロモーションを行うアラスカシーフードマーケティング協会の日本地区総代理店でも、卒業生が活躍している。1998年卒の家形晶子さんだ。

「アラスカ州はサステイナブル（持続可能）な資源の利用を州法に掲げ、養殖を行わず、天然の水産資源を守りぬくという選択をしました。アラスカ産の水産物は、100％天然もの。それが独特のプレミアム感につながっています」

家形さんはロシヤ・東欧語学科出身。「ゴルバチョフ大統領軟禁」の報道がきっかけでロシア語を専攻し、大学3年のとき、モスクワ大学に10カ月間語学留学した。当時はソビエト連邦崩壊の混乱により、治安も悪化。異国での暮らしはカルチャーショックの連続だったが、「違いを認め合い、理解したいという情熱さえあれば、わかり合える」ということを学んだ。

卒業後はロシア語を使って仕事がしたいと考え、横浜の水産専門商社に入社。まずはロシア産水産物を中心とする輸入業務に携わった。

「当時、日本の水産物マーケットは世界最大で、仕事も海外からの輸入がほとんどでした。その後は、ロシアの水産資源を中国で加工し、欧米などに売る三国間貿易にシフト。グローバル化していく水産物取引の現状を目の当たりにして、自分のキャリアについても考えるようになったのです」

ロシア一国に縛られず、世界の水産を幅広く知りたい――そう考え、2012年春に転職。今はアラスカ産シーフードのプロモーションや水産業界との折衝が主な仕事だが、関心は地球環境や水産資源にも広がっている。百戦錬磨の外国人との交渉も難なくこなす家形さん。そのタフネスは、大学時代に培われたものだ。

「大学時代で得た友人は、世界を舞台に活躍するタフな人ばかり。自分の価値基準に従って、揺るぎない生き方をしている人が多いと感じます。知らない世界を知れば知るほど、自分の世界も広がっていく。若い人はどんどん外に出ていってほしいですね」▼

ロシア・マガダンへの出張で、サウナと飲食を繰り返す、ロシア式のサウナ「バーニャ」を体験。

やかた あきこ
1973年福島県生まれ。98年東京外国語大学ロシヤ・東欧語学科ロシヤ語専攻卒業。横浜通商株式会社に14年間務めた後、2012年3月アラスカシーフードマーケティング協会に転職。現在は水産業界担当マネジャーとして、アラスカ産水産物のプロモーションに努めている。

graduated active person in society_02

へこんだ回数だけ強くなれる

服部貴志江

会社員

就職氷河期に大学を卒業し、旅行添乗員や派遣社員などを経て、外資系ソフトウエア企業に転職。ITの最前線で活躍している卒業生がいる。SAPジャパンに勤める服部貴志江さんだ。

大学では「希少価値がある言語をやりたい」と、チェコ語を専攻。4年生の冬に開催された長野オリンピックでは、1カ月間、チェコ選手団付きのボランティア通訳兼世話係を務めた。

「選手団の人の計らいで、閉会式に参加することができました。チームの一員として見てもらえたことが、うれしかったですね」

卒業した1998年は、ちょうど就職氷河期の真っ只中。「チェコと日本の架け橋になりたい」と、東欧に強い中堅旅行代理店に就職し、添乗員として40カ国以上を飛び回った。顧客は富裕層が中心で、いずれ劣らぬ個性派揃い。旅先ではハプニングも多く、苦労が絶えなかったという。

「飛行機が来ない、荷物を紛失した、予約したホテルから宿泊を断られるなど、トラブルは日常茶飯事。一瞬で状況を判断し、誰にも頼らず1人で対応しなければならない。人間力が養われましたね」

5年間の激務に疲れ、転職して輸出事務の仕事に就いたが、30歳を目前にして新しいことにチャレンジしようと、派遣会社に登録。たまたま紹介されたのが、世界有数のソフトウエアメーカー、SAPジャパンだった。

ITの世界は初めてとあって、最初は専門用語の洪水に戸惑ったが、地道に勉強を重ね、無我夢中で仕事をこなした。その頑張りが認められ、1年後に正社員として採用。現在は大手日系ITベンダーなどと協業しながら新規ビジネス開発に取り組んでいる。

「東京外大は外国人との接点が多く、異文化への理解を高めることができました。その積み重ねがあったからこそ今があると感じています。就職試験でなかなか内定がもらえなかったことは初めての挫折でしたが、へこんだ回数だけ強くなれた。自分のやる気次第で門戸は開ける。ぜひ、チャンスをつかみとってほしいですね」▼

長野五輪で知り合ったボランティアとは今でも交流がある。写真はチェコのフィギュアスケートの選手と。

はっとり きしえ
1975年千葉県生まれ。98年東京外国語大学外国語学部ロシヤ・東欧語学科チェコ語専攻卒業。旅行代理店に就職し、添乗員兼営業として40カ国以上を回る。2003年商社の子会社に転職し、3年間輸出事務を担当。06年より1年間、SAPジャパン株式会社に派遣社員として勤務した後、07年に正社員として採用された。

person doing research

1

言葉を通じて人間の根源に迫る

Interview with Toshihide Nakayama

中山俊秀 教授

アジア・アフリカ言語文化研究所

なかやま としひで
1986年東京外国語大学外国語学部英米語学科卒業。90年カンザス大学大学院修士課程修了。97年カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校大学院博士課程修了後、モントクレア州立大学助教授に就任。2001年からアジア・アフリカ言語文化研究所。助教授、准教授を経て12年より現職。

現在、世界には数千の言語が存在しているといわれている。その多くを占めるのが、欧米の言語とは異なった体系を持つ「未知」の言語だ。中山氏はカナダのヌートカ語研究を通じて、従来の枠組みをはるかに超えた、新しい言語学の可能性を見いだした。それは単に言語研究にとどまらず、「人間とは何か」への終わりなき探究にもつながる。

文・吉田爆子　写真・竹井俊晴

言語学には、「文法や文章の構造を研究する〝言語オタク〟的な学問」というイメージが付いて回る。だが、言語は、人間にとって欠かせないコミュニケーション・ツール。「人間とは何か」という根源的な問いに、言語学は重要なヒントを与えてくれるのではないか――そんな思いから、言語学の道に進む研究者も少なくない。

中山俊秀氏もその1人だ。

「僕が言語学に興味を持ったのは、中学時代に人間関係で悩んだのがきっかけです。コミュニケーションの難しさを痛感し、人間心理や言葉に興味を持つようになった。言葉を使って人間は何をしているのか、メッセージをどのように伝え合っているのか――それを知りたいという思いが、言語学研究の原点となったのです」

人生を変えた「人類言語学」との出合い

子供の頃から凝り性で、宇宙や地震のメカニズム、軍艦や飛行機、戦争記録など、興味を持ったことには片っ端からのめり込んだ。得意の英語を生かして、東京外大でも最難関の英米語学科に入学。だが、言語学にはあまり食指が動かなかった。「文法書や辞書を読むのが好きな人のための学問」という先入観があったためだ。

そんな中山氏の人生を変えたのが、2年目に受けた西江雅之教授の授業「人類言語学」だった。

「言語学とは人間の研究である、言葉を使った伝え合いの中で何が起こるのかを考えよう、というのが西江先生のスタンスでした。『言葉』という現象がいかに多面的で、人間の存在に深くかかわっているか。その不思議さと多様性を垣間見させてくれたのです」

言語学の世界にすっかり魅了され、大学院への進学を決意。だが、日本の大学院は専門化が進んでいて、基礎知識を学ぶには適していない。そこで、カリキュラムが充実したアメリカの大学院で学び直そうと、1990年カンザス大学大学院に留学。幅広く基礎を学ぶうちに、文の構造についての理論的研究に関心を持った。

だが、理論を学ぶうちに、中山氏はしっくりしないものを感じ始めた。言語学の理論は欧米の言語をベースに組み立てられているため、日本語に当てはめようとすると、うまくいかないことがある。例文の選び方の巧拙によって、理論の形が大きく変わってしまうことにも疑問を感じた。

「何より決定的だったのは、『言葉が実際の文脈でどのように使われているか』が、一切考えられていないという点でした。例えば、『私はご飯を食べます』という文章も、会話では『食べないよ、そんなの』と、語順を入れ替えて使うことがあります。そこには話し言葉特有のルールがあるはずなのに、言語学では書き言葉だけを対象として理論を組み立てている。『話し手不在、人間不在の言語学』で本当にいいのか――そんな違和感が日増しに大きくなっていったのです」

中山氏が知りたいのは、「なぜ、言葉の文法は今のような形になったのか」ということだった。その解を見つけるためには、人間の認知活動やコミュニケーションの実態に即して、「言葉が実際にどう使われているか」を見なければならない――そう考えた中山氏は、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校博士課程に進学し、カナダのブリティッシュ・コロンビア州に伝わる絶滅危惧言語「ヌートカ語」の研究に着手。それは、「なぜ」を探求する終わりなき旅路の始まりでもあった。

「話し言葉」に光を当て新しい言語学を創造したい

ヌートカ語は、それまで慣れ親しんでいた欧米の言語とは、全く異質のものだった。例えば、ヌートカ語のwáʔqimyipiʔaʔqu:ʔalには、「昔はよく家に集まって、ワイワイやったもんだよね」というような意味がある。1つの文章に相当する内容を、たった1語で表現してしまうのだ。また、ヌートカ語では動詞と名詞の区別がしにくいので、従来の品詞の分類方法を当てはめるのが難しい。

フィールドワークを重ねるたびに、それまで常識と思い込んでいたことが、次々に覆されていく。そこには、想像をはるかに超えた未踏の原野が広がっていた。

これまで、言語学の研究は欧米語の枠組みに縛られてきた。ところが、マイナー言語を調べていると、どうしても従来の理論に当てはまらないケースに突き当たってしまう。フィールドから見えてきたものに誠実であろうとすると、過去の研究手法や業績を自己否定しなければならない。しかし、「理論のための理論」の構築に汲々（きゅうきゅう）として、目の前の〝現実〟から目をそむけるのはいやだった。

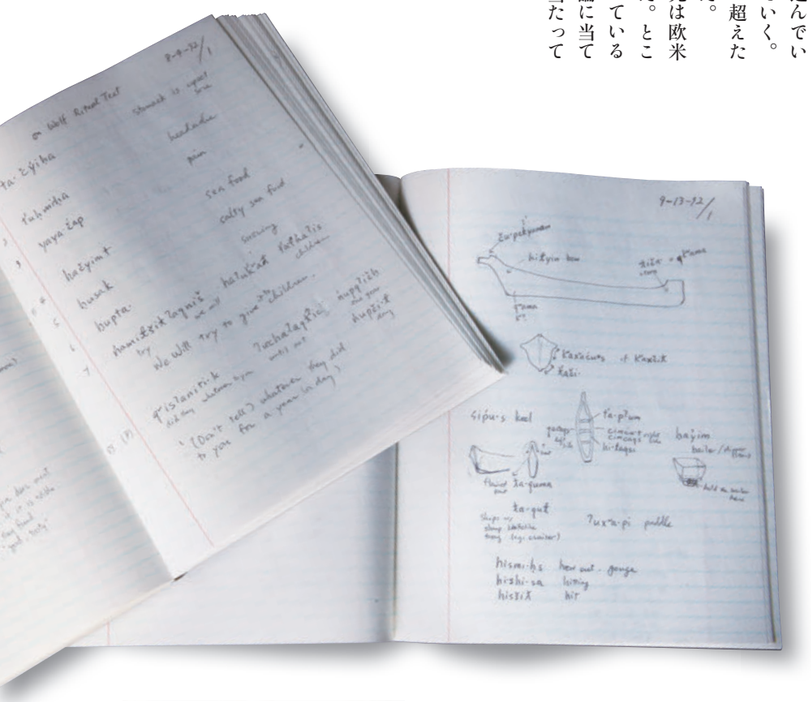
「フィールドで集めたデータを分析していると、自分では気づかないまま、既成の理論を現実に投影してしまうことがあります。しかし、それでは、日本食を持参して世界中を旅しながら、『どこに行っても同じだよ』と言うようなもの。そうならないためには、常に自分の研究手法を疑ってかかる必要がある。そんな苦しい作業をあえて自分に課しているのは、『言語の本当の多様性を見たい』という思いがあるから。フィールドで出合ったヌートカ語の手触りや肌感覚を、ゆがめることなく、そのまま受け取りたい――その思いが原動力になっています」

現在は、カナダでヌートカ語のフィールドワークを続ける傍ら、宮古島方言の調査にも注力。今後は、近代言語学では無視されてきた「話し言葉」に光を当てたい、と抱負を語る。

「『なぜ』という疑問に答えるためには、話し言葉をベースに、今の文法理論を根底からひっくり返さなければなりません。そのためには、理論で扱う言葉の基本的単位や語順のルールなど、さまざまな前提を変えていくことが必要です。これまで学んできたことをいったん捨て去り、全く新しい研究手法を作り上げなければならない。既存のパラダイムに縛られず、新しい言語学を創造したい、と考えています」

理論のための理論に安住することなく、未知の地平を目指して道なき道を行く。人間の根源に迫る、飽くなき探求心と情熱が、中山氏の挑戦を支えている。▼

〈上〉ヌートカの人々が住む土地は、豊かな海の資源と、高品質の森林資源に恵まれている。
〈左〉お墓には家系や家族が持つ権利などを示すトーテムポールを立てる慣習がある。



〈上〉フィールドワークの調査結果は、ノートに細かく記す。
〈下〉ヌートカ語を話せるのは現地でも高齢者がほとんど。学校の教員だった女性にヌートカ語を教わっている様子。

person doing research

2

「米」を通じてタイ経済を読み解く

Interview with Toshiyuki Miyata

宮田敏之 教授

大学院総合国際学研究院 国際社会部門

最高級の香り米とうたわれる、タイの『ジャスミン・ライス』。この米が世界的なブランドを確立するまでには、60年にわたる苦闘の歴史があった。ジャスミン・ライスを通じてタイの経済史を読み解き、農業に懸ける人々の奮闘ぶりを、世界に紹介したい――。そう語る宮田氏の視線は、人間への深い共感に満ちている。

文・吉田燿子　写真・高仲建次

みやた としゆき
1987年早稲田大学法学部卒業。高校教員を務めた後、早稲田大学大学院経済学研究科修士課程に進学。修士課程在学中、タイ国立タムマサート大学大学院、タイ国立チュラーロンコーン大学大学院に留学。98年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学。天理大学助教授を経て、2005年東京外国語大学助教授、12年より現職。

1993年、記録的な冷夏の影響で、日本は未曽有の米不足に直面した。店先から米が消え、日本全土は大混乱に陥った。いわゆる「平成の米騒動」である。

タイから米が緊急輸入されたが、そのタイ米が日本のジャポニカ米とは種類が異なるインディカ米であったことが、混乱に拍車をかけた。「タイ米はまずい」と酷評され、不法投棄される騒ぎにまで発展したのである。

「タイ米は本来、おいしいことで有名です。なかでも『ジャスミン・ライス』は最高級米としての評価を世界的に確立しています。しかし、93年の米不足では、緊急措置として品質の低い米が輸入されてしまった。それもタイ米の評価は下げる一因となったのです」

タイ社会経済史が専門の経済学者・宮田敏之氏はこう語る。

宮田氏は、87年に早稲田大学法学部を卒業後、地元・広島の県立油木高等学校に社会科教師として赴任。教科研究を通じてアジア経済への関心が深まっていったが、硬式野球部の監督という立場も加わり、忙殺される日々が続いていた。

新たな可能性を求めてタイ研究の道へ

「もう一度勉強したい」。その思いが募り、思い切って母校である早稲田の大学院に進学。経済学者である西川潤教授に師事し、研究者としての道を歩み始めた。

当時早大では、西川教授が、アジア独自の生態系や伝統文化に根差した「内発的発展論」を展開。一方で、川勝平太教授（現・静岡県知事）が、「ものを通じて経済をみる」という「文化・物産複合論」を提唱していた。

「西川先生の内発的発展論と、川勝先生の文化・物産複合論。この2つを大胆に統合する形で、東南アジアの経済発展を研究することはできないか――そんな思いから、タイの米の研究を始めたのです」

大学院では、世界的に知られる日本人のタイ研究者、末廣昭（東京大学）、玉田芳史（京都大学）、村嶋英治（早稲田大学）、飯島明子（天理大学）、小泉順子（京都大学）といった先生方のタイ語資料を駆使した実証的な研究に、タイを研究することの奥深さを学んだ。

93年には、タイ国立タムマサート大学大学院経済学研究科に留学。タイ語と経済学を学ぶ傍ら、タイ料理の食べ歩きやキャンプ、東南アジア諸国の留学生との交流も楽しんだ。

「2年間暮らしてみて思ったのは、タイの人は自分の楽しみに貪欲だということです。アパートの隣部屋の住人が真夜中までカラオケを楽しんでいても、注意するのがはばかられる雰囲気がある。旅行者にはわからない、タイ特有の深い文化があることに気づかされました」

その後もタイ国立チュラーロンコーン大学に移って研究を続け、修士課程修了後は京都大学の博士後期課程に進学。東南アジアを舞台とした「地域研究」に取り組む研究者たちとの交流を通じて、フィールドワークの大切さを学んだ。

「京大に行く前は、主に日本やタイ、イギリスの外交史料を使って研究していたのですが、京大に移ってからは、タイの稲作地域に足を運ぶようになりました。フィールドでの現場感覚がなければ、史料をリアルに読み解くことはできないし、歴史的背景がわからなければ、現在のことも理解できない。そこで、フィールドワークと経済史研究を両輪とする、現在の研究スタイルに行き着いたのです」

タイ東北部に広がる
ジャスミン・ライスの田んぼ。
「トゥンクラーローンハイ地域
（グラー族も涙する平原）」と呼ばれ、
乾期は干ばつ、
雨期は洪水というやせた土地だが、
ジャスミン・ライスを作るには
最も適した環境だ。

無名の人々の奮闘ぶりを伝えたい

研究室からフィールドへと飛び出した宮田氏が、次に注目したのが、香り米『ジャスミン・ライス』だった。ジャスミン・ライスは、もともとタイ中部の農村で細々と作付けされていたが、60年代にはタイ政府の推奨米とされ、70年代にはタイ東北部で栽培が広がり、その芳醇な香りと味わいで世界市場を席巻。60年という歳月を経て、最高級米としてのブランドを確立した。

「ジャスミン・ライスは、肥沃な土地で作ると、不思議なことに、香りがうまく醸し出されない性質を持っています。つまり、土壌がやせた貧しい農村だからこそ、世界最高級の米を作ることができたのです。ところが、生産量が少ないので利益が上がらず、農家に利益を還元することができない。そのような中、ジャスミン・ライスを精米して販路を開拓して、栽培農家の収入増に成功した農協も現れました。ブングート女史を組合長とするタイ東北部ローイエット県のガセートウィサイ農協です」

宮田氏がブングート氏と出会ったのは10年前のことだ。ブングート氏は、ジャスミン・ライスの精米工場を作るなど生産性向上を図り、販路を開拓して、農家に利益還元しようと奮闘していた。やがて、農協の経営再建に成功し、2006年にはタイ政府の「最優秀農協組合長賞」を受賞。ブングート氏との出会いは、宮田氏の研究にとっても大きな転換点となった。地域の農村開発やリーダーシップのありようを目の当たりにして、新たな展望が開けてきたのである。

「ジャスミン・ライスが世界的な商品となった背景には、無名の生産者や農協、輸出業者、米の安全やブランド化に尽力した企業の存在があった。苦労しながら農業で頑張っている人々に光を当てて、その奮闘ぶりを紹介したい。タイの地域力を研究し、それを日本や世界に向けて紹介することが、地域研究者としての自分の役割だと思っています」

今後は、タイの米経済150年史を1冊にまとめ、タイ米を原料とする泡盛の研究も続けたい、と宮田氏。さらに、これまでの研究成果をタイ語や英語に翻訳し、タイの人々や外国の研究仲間にも読んでもらいたい、と抱負を語る。

学部の授業では、タイ語講読、タイ地域研究や東南アジア経済論、東南アジア経済・タイ地域研究ゼミなどを担当。

「大学でタイ語を学んだというチャレンジ精神は、社会に出ても高く評価される。それは将来、国際舞台で生きていく上で、たいへん重要なことだと思います」

研究室には、学生の名前入りの集合写真が貼られている。タイ語専攻の学生やゼミの学生の名前を覚えるための工夫の1つだという。

「生真面目なのが東京外大生のいいところ。その長所を生かして、学生の潜在能力を引き出せるかどうかは、教師の力量次第です」

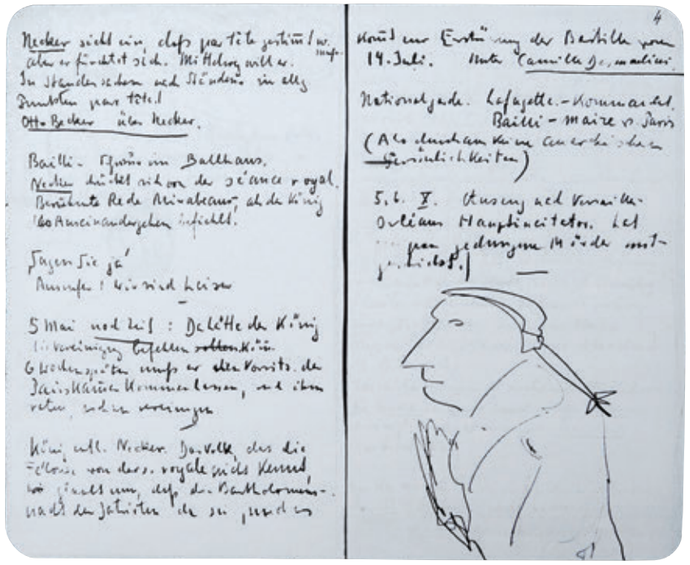
一瞬、〝熱血先生〟の素顔が垣間見えた。▼

ジャスミン・ライスは、
アメリカでも作られ（右）、
日本（左）も輸入するなど、
世界各地で食べられている。

ジャスミン・ライスに
ついての研究結果をさまざまな
媒体で発表している。

表現主義の世界に魅せられて

Interview with Akane Nishioka



西岡氏が苦しみながらも読み説いた
ゲオルク・ハイムの学生時代の直筆ノート。

西岡あかね 准教授

大学院総合国際学研究院 言語文化部門

にしおか あかね
1994年岡山大学文学部文学科独語独文専攻卒業。2002年東京大学人文社会系研究科ドイツ語・ドイツ文学専攻単位取得退学。04年ヒルデスハイム大学大学院博士課程修了、文学博士。立教大学講師を経て、10年東京外国語大学講師、13年より現職。

20世紀初頭にドイツで台頭した表現主義は、あらゆる芸術分野に影響を与える一大ムーブメントとなった。その担い手となったのが、既成の芸術に反旗を翻した、20代前半の若者たち。夭折の天才たちは、何を表現し、何を後世に遺したのか。その足跡を訪ねる西岡あかね氏の探求心はとどまるところを知らない。

文・吉田燿子　写真・高仲建次

20世紀初頭、ドイツでは表現主義と呼ばれる芸術運動が台頭。外観の印象や写実よりも、内面の表出に重きを置く、新しい芸術様式が花開いた。表現主義は1910年代から1920年代にかけてヨーロッパを席巻し、芸術史に新時代を築くこととなる。

「表現主義文学とは一種のサブカルチャーで、反抗的な若者文化としての側面がありました。若い文学者は、文学キャバレーを拠点として詩の朗読会や寸劇を行いながら、世に出る機会を秘かにうかがっていた。インディペンデント系バンドが渋谷駅前で路上ライブをするように、センセーショナルに世間の注目を集めようとしていたのです」

そう語るのはドイツ文学研究者・西岡あかね氏。西岡氏によれば、表現主義文学の魅力は「未完成なところ」にあるという。

「表現主義の文学者の多くは、新しい文学を完成させる前に、第1次世界大戦で亡くなっています。しかし、既存の文学の枠にとらわれず、新しい文学の在り方を追求したという点では、現代のパフォーミングアートにも通じるものがある。表現主義は、いわば20世紀文学の揺籃（ようらん）の地としての役割を果たしたのです」

ドイツ留学で転機 未発表資料の発見も

西岡氏とドイツ文学との出合いは、10代の頃にさかのぼる。ヘッセやリルケを愛読し、岡山大学では独語独文学を専攻。ドイツ語が上達するにつれて、学問への関心も高まっていった。

「表現主義文学の授業を通じて、文学研究と『文学作品を読むのが好きだ』ということとは全く異質だと感じました。そのおもしろさにふれ、もっと勉強したいと思うようになったのです」

学部の教員の勧めもあって、東大大学院に進学。表現主義詩人ゲオルク・トラークルについて修士論文をまとめた後、博士課程に進んだ。表現主義研究の大家であるシルヴィオ・ヴィエッタ教授に師事するため、ドイツのヒルデスハイム大学に留学したのは、98年のことだ。

だが、留学早々、西岡氏はネイティブ・スピーカーの話すドイツ語の手厳しい洗礼を受けることとなる。

「講義はまだいいのですが、学生同士の議論が始まると全くお手上げでした。スラングや方言が飛び交い、話題もどんどん飛んでいくので、全体の2割しか聞き取れない。ドイツ語には自信があったので、かなりショックでしたね」

ドイツでの博士号取得を目指し、博士論文の執筆に取りかかったが、研究テーマがなかなか決まらない。ドイツ語で論文を書く難しさにも音を上げそうになった。

「そもそも自分は研究者になる能力があるのか、エライとこに来ちゃったなあ、と思いました。でも、ドイツ政府の奨学金までもらったからには、意地でも博士論文を完成しなきゃいけない。こうなったら研究者になるしかない、と、退路を断たれた気分でした」

転機が訪れたのは、ドイツに来て2年が経過した頃のことだ。表現主義の詩人ゲオルク・ハイムの遺稿がハンブルグ大学にあると知り、西岡氏は調査のため現地入りした。ようやく遺稿を探し当てたものの、手書きの文字を全く判読することができない。「私は一体、何しにここまで来たんだろう」

――そんな無力感に襲われた。

だが、必死で資料に食らいつくうちに、徐々に手書きの文字を読みこなせるようになった。さらに、2回目の調査では、未発表の資料を発見するという僥倖（ぎょうこう）にも恵まれた。これを機に、西岡氏は博士論文完成に向けて、大きな一歩を踏み出すこととなる。

時を同じくして、ドイツ語のスキルも飛躍期を迎えていた。

「最初は全体の2割しか聞き取れなかったのが、2年後には5割ほど聞き取れるようになった。それからは早かったですね。ある日突然、シナプスがつながったみたいに、ドイツ語が全部聞き取れるようになったんです」

博士論文では、表現主義の詩人ゲオルク・ハイムとゴットフリート・ベンを中心として、表現主義文学における人間像の変化に注目。自然主義や象徴主義とも比較しながら、精神史・思想史の潮流と文学史の流れをパラレルに論じた。その成果が認められ、06年にヒルデスハイム大学で博士号を取得。帰国後は立教大学で教職に就いた。

未知の世界に飛び込んでこそ

「博士論文では主に文体や表現に焦点を当てたため、表現主義の運動体としての側面を照らし損ねたという思いがあった」と西岡氏。その後は、表現主義の拠点となった文学キャバレーや、大正時代の日本における表現主義受容のプロセス、戯曲などにも研究の幅を広げている。

「今、注目しているのは、表現主義から派生したワイマール共和国時代以降の社会主義文学。将来的には、東ドイツの全体主義的な芸術文学体制も見ていきたいですね。全体主義的な芸術は〝インターナショナル・スタイル〟といわれていますが、本当にそれほど統一的な様式を成しているといえるのか、インターナショナル・スタイルに対するアプローチの仕方にエリアごとの違いはないのか、という点を追求したいと考えています」

現在は第一線の研究者として活躍する西岡氏だが、もともと、「研究者になりたい」という強い思いがあったわけではないという。だが、「退路を断たれる形で」先へ先へと進むうち、研究のおもしろさに開眼していった。

その経験から、「若いうちは、自分の進路を限定しすぎない方がいい」と語る。

「よく『自分の好きなことを見つけなさい』といいますが、進路を早く決めすぎると、未知のことを学ぶ機会を失ってしまいます。むしろ、嫌いだ、興味がないと思い込んでいるものにこそ飛び込んでほしい。黒澤明が『好きなことだけやりなさい』というアドバイスを若者にしていますが、こんなことは80歳になって初めて言えること。黒澤明だって、若い頃はやりたくないこともやってきたはずだし、それを通じて彼の『やりたいこと』を見つけたはずですから」▽

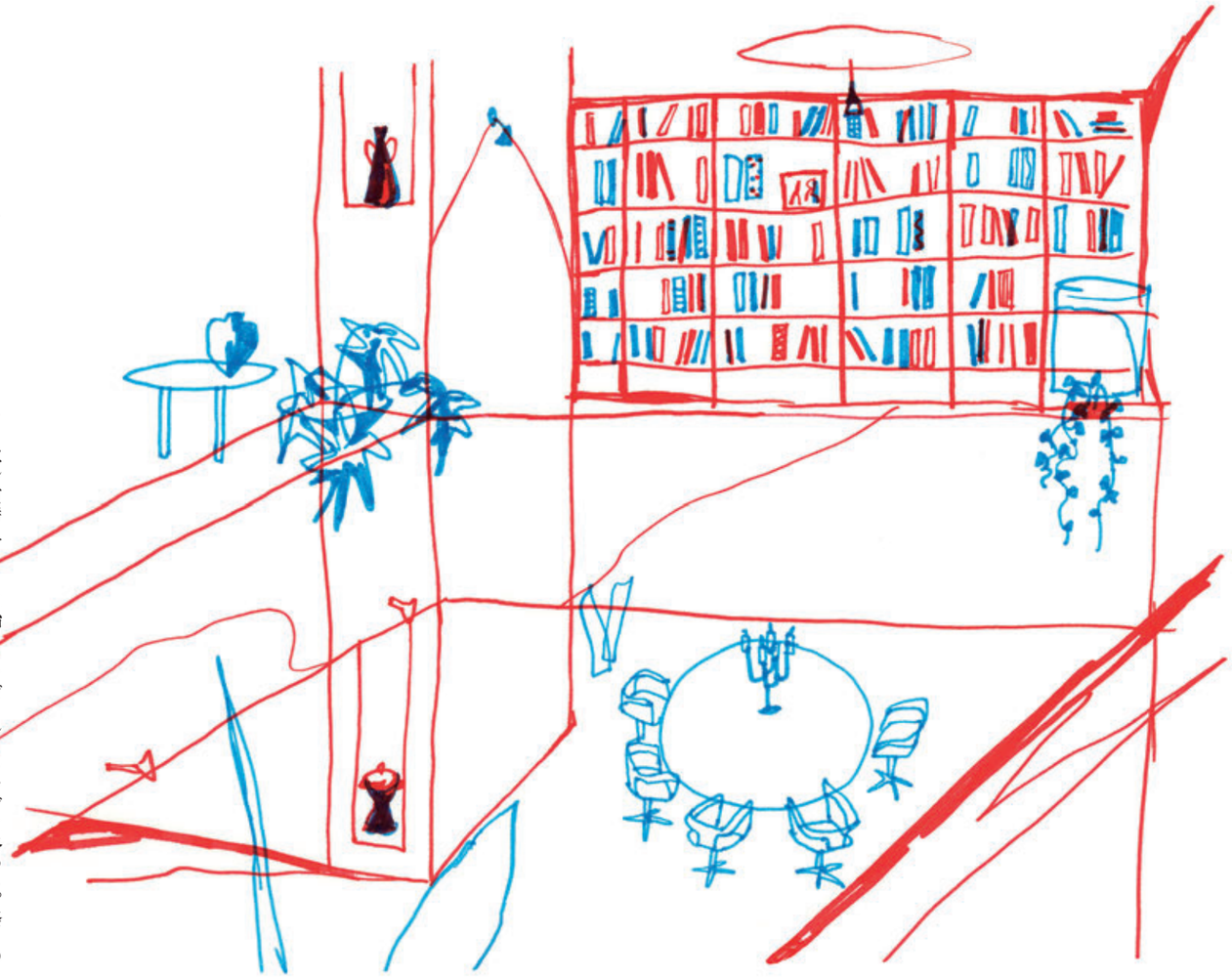
ヒルデスハイム大学留学時代。
左から2番目が西岡氏の師匠である
シルヴィオ・ヴィエッタ氏。

ドイツの国費留学時代に
書いた博士論文は
著書として出版された。

「聴」

kiku

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。



イラスト・ミヤギ ユカリ

1. とある夕べのタゴール・ソング

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 講師
丹羽京子
Text : Kyoko Niwa

タゴールが

ノーベル賞詩人であることを知っている人でも、その詩集『ギターンジャリ』を読んだことがある人でも、それがもともとはベンガル語で書かれていて、さらにはそれらが歌であることを知っている人はまれだろう。

それらの歌はロビンドロ・ションギト、あるいはタゴール・ソングと呼ばれ、ベンガル地方に行けば、ありとあらゆるところで耳にすることになる。このタゴール・ソングがベンガル人にこよなく愛されていることは疑いを入れないのだが、非ベンガル人の間ではその好き嫌いは分かれるようである。夫の転勤で引っ越してきて、せっかくコルカタにいるのだから、とタゴール・ソングを習いに行く女性がいる一方で、コルカタで生まれ育ちながらも、ベンガル語とは異なることばを繰り、どこがいいのかわからないと評する人たちも少なくない。かくいうわたしも文学専攻でありながら、そのことばは素晴らしいと思うものの、歌となると少なくも当初は、そのリズム感に乏しいどこかぼんやりとした曲調に入り込めなかったひとりである。

それでもタゴール・ソングはどこからでも日常に入り込む。ラジオをつければタゴール・ソング、各種催し物もタゴール・ソングに始まりタゴール・ソングに終わる。祭りの日ともなれば早朝から、コルカタ名物のブック・フェアでも一日中えんえんと、音割れもものともせず、スピーカーから大音響でその歌は響く。

そんな、好きになる前から押し寄せるようなタゴール・ソングの嵐に困惑していたわたしのある日の経験である。当時わたしはある女性にタゴール作品のてほどきを受けていたのだが、その彼女は一時期、病魔に侵された老婦人を自宅に引き取って面倒を見ていた。とある夕べ、末期症状にあって苦しい日々を送っていたその女性のために、彼女は友人のタゴール・ソング歌手を招いて枕もとで歌をうたってくれるようにと頼んだのだった。レッスン半ばで彼女は本を閉じ、隣室から聞こえてくる歌に耳を澄まし始めた。普段聞きなれていたものとは違う、伴奏もなく、ごく抑えた声で、薄暗がりにひっそりと響くのは、別世界から聞こえてくるような不思議な歌だった。歓喜に沸き立つでもなく、哀しいでもなく、なんとも言い表しようのない旋律。これぞタゴール・ソング。数日後、その老婦人は静かに息を引きとったが、恐れずに旅立つことができたのは、あの歌のおかげに違いないと、わたしも含めてその場にいたみなは信じている。▼

にわ きょうこ
東京外国語大学修士課程修了後、コルカタ(旧カルカッタ)のジャドブプル大学大学院比較文学科博士課程で博士号取得。専門は近現代のベンガル文学。訳書に『ジョルシャゴル』(大同生命国際文化基金、1993)、『ノズルル詩集』(花神社、1995)、『ドラウパディー』(現代企画室、2003、共訳)、著書に『タゴール』(清水書院、2011)など。

わたしたちは、

生活のさまざまな場面で歌をうたい、詩に心を託して生きている。悲しいとき嬉しいとき、そんな気持ちを歌が映し、つらく挫けそうになったときには、詩が心の支えになってくれることもある。大きな震災があって、とても厳しい境遇に置かれた被災者たちを慰めたのも歌だったし、そんなときに詩が巷にあふれて、わたしたちは詩歌の力をあらためて深く思い知った。歌や詩は、人の心に寄り添い、気持ちを抱き留め、またその思いを繋いでくれるものなのだ。

そうだとすれば、歴史や社会を問う学問の場で、そんな詩歌に〈聴く〉こともできるのではないか。「歌は世につれ」と言うけれど、そうした世に生きる人々の心のことを歌に聴いてみようという考えである。

大学で歴史や社会に関心をもち、それを学問的に考え始めようとするとき、その歴史や社会には名も知られないような多くの人々（民衆）が実際に生きていると気づいて、そうした人々の生の喜びや悲しみ、それぞれの人生に託された思いにまで触れたいと願う人は少なくないだろう。しかし、普通に生きているそんな人々は、自分の見方や考えをまとめて表明することは少ないものだし、ましてそれを書き物に残すということはめったにない。これに対して学問の方は、実証的な確かさを重視する観点から普通は残された文書史料に頼って研究を進めるものだから、多くの場合そんな人々の心の声を〈聴く〉までには到らない。それにより、学問が明らかにする歴史は、王侯貴族や政治家や軍人や学者など、書物や文書を後世に残せる一部の特権的な人々だけが登場する「歴史」となってきた。

これではまずいという思いがあって近年では、一般の人々の体験や証言を重視し、その人々に実際に話しを聴こうという試みも始められて、そこに「オーラルヒストリー（口述史）」という学問分野も成立してきている。これは学問の重要な変化なのだが、しかしこの試みにも限界があって、なんと言っても口述証言は生存者だけに求められるものだから、遠い過去のことや死者たちの声はそれでは残らない。そこで、さまざまな時代や社会に生まれている詩や歌に、それを歌った人々の心を聴こうという試みが見直されてくる。

もちろん、詩や歌は特定のアーチストの作品だったりするから、そこに民衆一般の心を聴くためにはさまざまな方法上の工夫が必要だ。学問はどんな工夫の上で、どこまで人々の心を聴き取っているのか、わたし自身も『詩歌と戦争――白秋と民衆、総力戦への「道」』という著作でそれを試みているので、一度手にとって見て下さると嬉しい。▼

なかの としお
1987年東京大学大学院人文科学研究科（倫理学専攻）博士課程修了。専門は、歴史社会学、社会思想史。著書に、『マックス・ウェーバーと現代』、『大塚久雄と丸山眞男』、『詩歌と戦争』など。

2. 歌に聴く

大学院総合国際学研究院 国際社会部門 教授
中野敏男
Toshio Nakano

3. 耳を凝らす修行

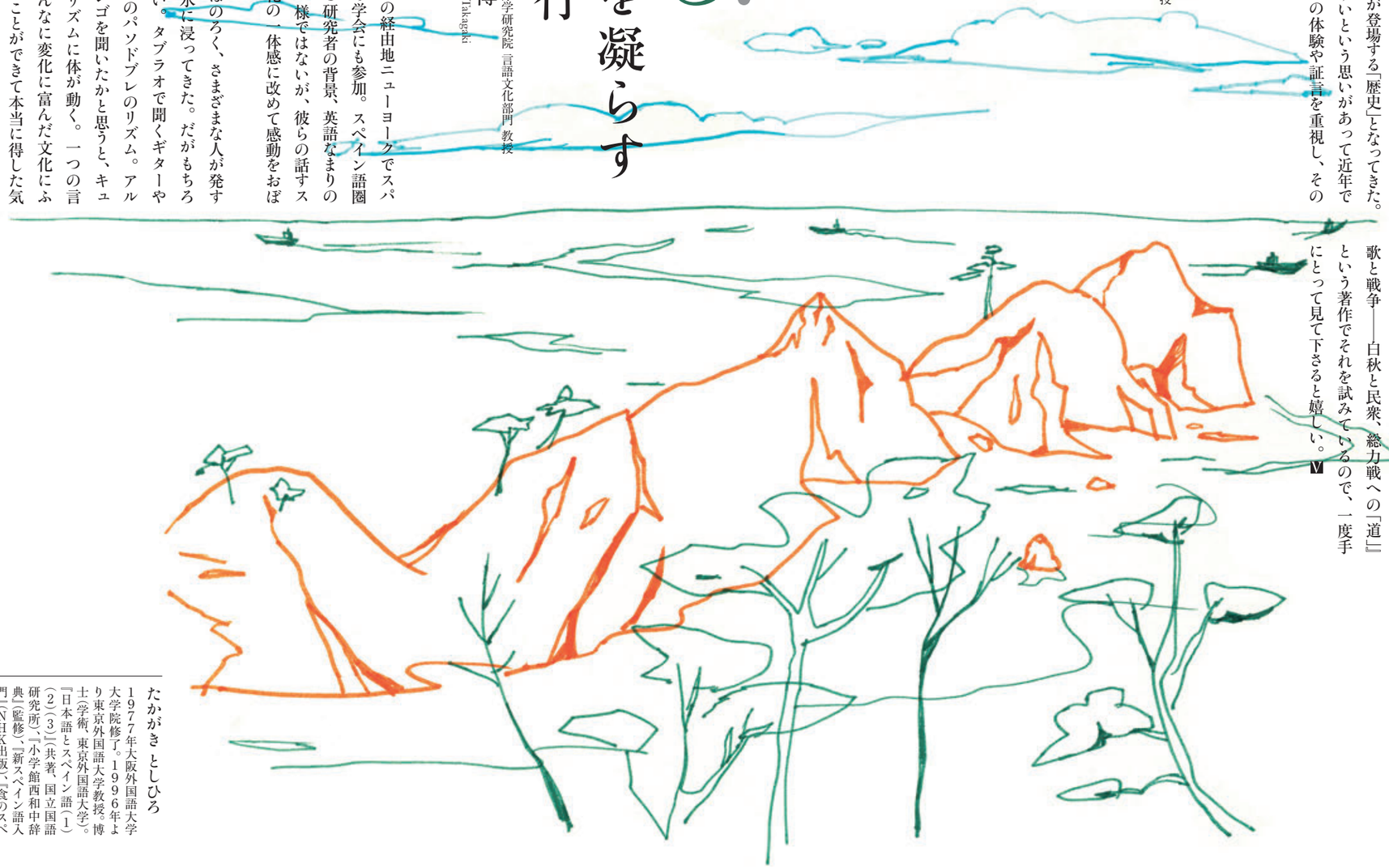
大学院総合国際学研究院 言語文化部門 教授
高垣敏博
Text : Toshihiro Takagaki

オリーブ

オイルで炒められたニンニクのこうばしい香が嗅覚を刺激する。立ったままワインを手にした人々の大声が聞こえてくる。スペイン人は何人もが同時に喋ると言われるがまったくその通りだ。耳を凝らしてもわからない。学生時代からいまにいたるまで耳を凝らす修行だったといえる。マドリードに着くときとバルセロナに着くときでもまた違う。カタルーニャ語を話す人々からわかる言葉を探そうと耳を傾けるのはさらなる修行。バスク語の地方、ガリシア語の北西部に行くときもしかりだ。しかしその日もバルの前でふたたびスペインに戻ってこられた歓びに酔う。

思えば、数日前まで南米ボリビアの首都ラパスでアンケート調査をしていたのだった。中南米から東京、今度はスペインへと毎年のように地球を半周以上する。標高4000メートルにあるその大学には親が先住民ケチュア語かアイマラ語あるいはその両方を話す子弟ばかりが学んでいる。これまで10年余りアルゼンチンからアンデス地域、カリブ海の国々をめぐりスペイン語のバリエーションについて調査をしてきた。つくづくその多様性に圧倒される。パラグアイ・アスンシオンの空港に降り立ったときもグアラニー語を話す人たちに囲まれ困惑したことを思い出す。調査後、東京までの経由地ニューヨークでスパングリッシュの学会にも参加。スペイン語圏出身の親をもつ研究者の背景、英語なまりの度合いなどは一様ではないが、彼らの話すスペイン語・文化の一体感に改めて感動をおぼえる。

修行の歩みはのろく、さまざまな人が発する声・音の洪水に浸ってきた。だがもちろん愉しみも多い。タブラオで聞くギターやカンテ、お祭りのパソドブレのリズム。アルゼンチンのタンゴを聞いたかと思うと、キューバのソンのリズムに体が動く。一つの言語を学んでこんなに変化に富んだ文化にふれ、音を味わうことができて本当に得した気分になる。▼



たかがき としひろ
1977年大阪外国語大学大学院修了。1996年より東京外国語大学教授。博士（学術、東京外国語大学）。『日本語とスペイン語（1）（2）（3）』（共著、国立国語研究所）、『小学館西和中辞典』（監修）、『新スペイン語入門』（NHK出版）、『食のスペイン語』（東洋書店）ほか。

Influential Face

歴史を刻む在学生

Text by
Yoko Yoshida
Photo by
Misato Iwasaki

「日本から母国を見つめ続けて」

モハメド・オマル・アブディン

大学院総合国際学研究科　国際協力専攻　平和構築・紛争予防（PCS）専修コース

〈上〉ブラインドサッカーには、
全国優勝をするほどまで
情熱を持って打ちこんだ。
（撮影：鰐部春雄）
〈中〉スーダン人である妻のアワティフ（左）は
専門学校でアラビア語を教えている。
妻と娘2人の4人家族。
〈下〉音声読み上げソフトを使い執筆した
初の著書『わが盲想』。
自分ならではの"ゆるゆる"した視点で
世の中を変えていきたいと考えている。

アフリカ・スーダンの首都ハルツームで生まれ、12歳のときに視力を失ったモハメド・オマル・アブディンさん。ハルツーム大学法学部に進学したものの、政情不安で大学が閉鎖。将来に不安を感じていたとき、「日本で鍼灸を学ぶ」という日本留学プログラムの存在を知った。

19歳で来日し、盲学校で日本語と鍼灸、点字を、筑波技術短期大学でパソコンを学んだ。2003年、東京外大の日本課程日本語専攻に入学。日本の政治経済や文学などを幅広く学んだが、なかでも興味を惹かれたのが夏目漱石だった。

「漱石の文学は、文体が美しくて無駄がない。1つのパラグラフだけでも立派な作品になっている。そこが魅力ですね」

再び人生の転機が訪れたのは、大学2年のときだ。内戦が続いていた母国スーダンで、政府と反政府組織が和平協定を締結。そのニュースを聞いて、内戦で命を落とした多くの友人の姿が脳裏に浮かんだ。紛争も和平も、政治家の胸算用1つで決まってゆく。200万人に上る内戦の犠牲者は、一体何のために死んだのか。「スーダンの南北紛争の歴史を研究したい」という思いが募った。

07年大学院の平和構築・紛争予防専修（PCS）コースに進学。現在は博士後期課程で、博士論文と格闘中だ。

「スーダンの内戦の原因は南北問題だといわれていますが、そこには北部圏の権力闘争のひずみが反映している。こうした国家の構造にメスを入れない限り、今後もさまざまな問題を生み続けていくのではないか。博士論文ではその点に光を当てていきたいと考えています」

論文執筆には音声読み上げソフトを活用。今春には初めての著書『わが盲想』も出版した。研究の傍ら、ブラインドサッカー選手や『スーダン障害者教育支援の会』の代表理事として活躍する。2歳と8カ月になる2人の娘のパパとして、育児にも奮闘中だ。

「娘って、母親より父親の方が好きなんだよね」。そう言って目尻を下げた。 V

Mohamed Omer Abdin
1978年スーダンの首都ハルツーム生まれ。
19歳で来日し、
福井県立盲学校で点字や鍼灸を学ぶ。
2003年東京外国語大学外国語学部に入学。
13年に初の著書『わが盲想』（ポプラ社）を出版。

五感と心の目で
世界を
「盲想」する

News

2013年4月、
東京外大のメンバーになった方々から
一言いただきました

篠田英朗
SHINODA Hideaki
大学院総合国際学研究院
国際社会部門（国際関係学）
教授

専門に研究しているのは、世界の武力紛争と、紛争解決のための平和構築です。また国際社会の歴史・思想についての研究も進めています。ただし授業では、開発援助や人道援助を含む国際協力を全般的に扱うことを心掛けています。高校生の時までは、ミュージシャンになり、紛争問題などを曲の題材とし、時折アメリカの大統領に会って説教する、U2のボノのような人生を夢見ていました。自分には才能がないことを確信できたのは、今もミュージシャンをしている高校の同級生のおかげです。ただ、それで大学時代には目標がなく、いろいろな職業を考えました。

学者を目指す決断をしたのは、結局は消去法でした。それにしても、難民ボランティアをしていたことやイギリスに語学留学したことが影響しましたので、大学時代にはとにかくたくさんのことを試してみるのが大切だと思っています。歌うように授業を行い、作曲するように本を書くのが理想ですが、残念ながらそのようにうまくはやれません。

〈座右の銘〉
歴史のないものだけが定義可能である
——F.ニーチェ

〈お薦めの1冊〉

『マネジメント
—基本と原則』
ダイヤモンド社
P.F.ドラッカー（著）
上田惇生（訳）
一言……「人生はマネジメントです」

##長屋尚典
NAGAYA Naonori
大学院総合国際学研究院
言語文化部門（フィリピン語学）
講師

子供の頃から他の人と同じことをするのが大嫌いで、大人になったら誰もやらない変わったことをやってみたいと思っていました。大学3年生のとき「フィリピンの言語は世界の他の地域では見られない珍しく変わった文法体系を持っている」と教わって以来、フィリピンの言葉（の言語学）をずっと勉強しています。

言語を勉強することの醍醐味は、第1に、言語の美しさを発見できることです。人間の話す言語は美しく不思議で、いつも驚きを与えてくれます。第2に、言葉を通していろんな人に出会えることです。面白い人、変な人だけでなく、新しい言葉で思考し意思疎通する新しい自分にも出会えます。

これら2つの醍醐味を、東京外国語大学ほど味わえる大学は世界に他にありません。ですから、僕はこの大学で教えていることをとてもしあわせに思っています。そして、これを読んでいるみなさんと一緒に言葉を学び、言葉について考える日が来ることを心から楽しみにしているのです。

〈座右の銘〉
“Gavagai?”
——W.V. Quine, 1960, *Word and Object*, MIT Press.

〈お薦めの1冊〉

『言語学の教室—哲学者と学ぶ認知言語学』
中央公論新社
西村義樹・野矢茂樹（著）
一言……「これを読んで面白いと思った人は僕の授業にも来てみてくださいね」

01

野平宗弘
NOHIRA Munehiro
大学院総合国際学研究院
言語文化部門（ベトナム文学）
講師

涙や血や汗、唾に鼻水、酸っぱい胃液、それにヘーゲル弁証法を体現する器官から抑えもきかず噴き出すものに至るまで、純潔な私の中に溜まっていたとは信じがたい諸々の体液が得体の知れない匂いを放って過ぎ去り、そして時には逆流して来てこの胸を引き裂こうともする、そんな素敵な思い出が止めどなく流れる母校に戻って参りました。

言語でもって〈世界〉を串刺し、意味で固めて我有化しようとするディア＝ロゴスとは別の言語使用、例えば「お前は誰か」と尋ねられて「知りません」と答えたダルマさんや、聞かれた自分の名前や出処を正直に答えたらひどく怒られ何年もかかってやっと答えを見つけ出した出家者（ホームレス）の対話のような、要するに語学教育にはまったく役立たない類の言語の使用に、〈世界〉と言葉と私たちとの別の関係性、別の有り方の可能性を見てみたい私自身の探求はさておき、学生たちが世界に羽ばたく立派なマイホーム主義者になれるよう教育に励んで参ります。

〈座右の銘〉
雨降らばふれ、風吹かばふけ
——一休さん

〈お薦めの1冊〉

『人間の悲劇』
講談社
金子光晴（著）
一言……「『ぱんぱんの歌』の詩人の言葉にシビレます」

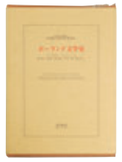
森田耕司
MORITA Koji
大学院総合国際学研究院
言語文化部門（ポーランド語学）
准教授

ポーランド語と出会うことができたのは、もしかするとロシア語のおかげだったのかもしれません。学生時代はロシア語を専攻していたのですが、当時（今も？）他のスラヴ語はほとんど注目されていなかったことを不満に思い、ロシア語以外のスラヴ語を学びたくなったのです。そこで、どのスラヴ語にしようかと思いを巡らせたところ、ロシアがギリシャ・東方正教文化圏の代表だとすると、それに対するラテン・カトリック文化圏の代表はポーランドだと思い、それならポーランド語も勉強し、ロシア語と比べると何か面白いことがわかるかもしれないと思い至ったのが、ポーランド語を学び始めたそもそものきっかけでした。そして、ポーランド語の魅力にどんどんはまっていきました。

ポーランドで博士号を取得し、さらに教員として勤務するほどポーランド語にどっぷり浸かった経験がありますので、その経験も大いに生かして、ポーランド語の魅力を思う存分みなさんに伝えていきたいと思います。

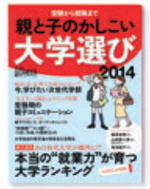
〈座右の銘〉
Kto idzie z nadzieją, ten dojdzie do celu.

〈お薦めの1冊〉



『ポーランド文学史』
未知谷
チェスワフ・ミウォシュ（著）
関口時正ほか（訳）
一言……「ポーランド（文学）の魅力がぎっしり詰まった1冊です」

02 3年連続「本当の“就業力”が育つ大学」総合1位にランキング



「日経CAREER MAGAZINE “受験から就職まで　親と子のかしこい大学選び”」（日経HR、2013年6月17日）の特集「本当の“就業力”が育つ大学ランキング」で本学が3年連続で総合1位に輝きました。

就職活動中の学生を対象に「学業」「課外活動」「交友関係」「就業観」について行われたアンケートに基づき算出されたランキングで、本学は「学業」「課外活動」で特に充実した結果を示すものとなりました。

「ゼミに入っている100%」
「授業が面白い88%」
「友人はいるか(学内外)100%」などで高ポイントを示した。

03 新しい情報発信「TUFS Today」がスタート

2013年度より、本学の情報を発信する新しい媒体としてブログならびにメールマガジン「TUFS Today」がスタートしました。メールマガジンは毎月1回、卒業生、在校生やその保護者等を対象に本学の最新の情報をお届けしています。ブログでは、特集記事、You TubeのTUFS Channel等の更新情報を随時紹介しています。

〈本学HPトップページ〉

トップページのバナーがTUFS Todayへの入り口

〈TUFS Today ホーム〉

メールマガジンのご登録についてはこちら>>>
https://tufstoday-mm.bqs.jp/reg1/join_mail/

04 東京外国語大学出版会が語学教科書を含む新刊3冊を発行

『法言語学入門——司法制度におけることば』

もしものとき、「ことば」は私たちを守ってくれるのか。そして、私たちは人を正しく裁くことができるのか。本書は、社会言語学・応用言語学の専門家として司法の現場に精通した著者が、法と言語にかかわる幅広い問題について考察した入門書です。裁判員制度が始まった今、言語学を学ぶ学生、研究者のみならず、司法関係者、市民運動関係者にもぜひお薦めしたい1冊です。

ジョン・ギボンズ 著
中根育子 監訳／鶴田知佳子、水野真木子、中村幸子 訳
2013年4月30日発行
A5判／並製／416頁
定価：本体2,800円+税

『大学のアラビア語 詳解文法』

本学で近代イスラム、宗教学、アラブ政治や思想・歴史の分野を研究・教育するアラビア語教員が書き下ろした教科書です。初学者から中級・上級者までを対象とした全32章からなるテキスト。この1冊で基礎力はもちろん応用力も鍛えられる充実した内容となっています。文法事項の理解度を確かめる練習問題、便利な単語帳、中・上級レベルの読解・作文・会話に役立つ囲み解説付きです。

この秋、さらにアラビア語関連の教材が2冊刊行されます。ご期待ください！
『大学のアラビア語 表現実践』（青山弘之、イハーブ・アハマド・エベード 著）。『大学のアラビア語 発音教室』（ハナーン・ラフィーク、吉田昌平 著）。

八木久美子、青山弘之、イハーブ・アハマド・エベード 著
2013年4月1日発行
B5判／並製／337頁
定価：本体3,500円+税

『大学のロシア語Ⅰ——基礎力養成テキスト』

本学でロシア語学、文学、文化を研究・教育する教員が書き下ろした本格的な教科書です。初学者からさらなるロシア語の習得を目指す人までを対象としています。

基礎力を養成するための全28課からなり、ロシア語習得のポイントを押さえた練習問題と文法表・単語帳、そして発音・聞き取り・会話のスキルを身につけるためのネイティブによる音声CDが2枚付いています。

沼野恭子、匹田 剛、前田和泉、イリーナ・ダフコワ 著
2013年3月29日発行
B5判／並製／275頁
定価：本体3,200円+税

05 国際交流会館3号館が開館

東京外国語大学の新しい学生寮である、国際交流会館3号館が完成し、4月から入居が始まりました。本学では、世界の多くの国・地域から、多様な文化的背景を持つ留学生が集まっています。国際色豊かなキャンパスに、新たに開館した国際交流会館3号館には、本学の留学生のみならず一般の学生も入居可能となっており、日常的な国際交流が行われています。学生を中心とした交流イベントも企画されています。

地上8階建てに230室の個室が完備されている

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉古くから人生は舟に譬えられてきた。陸の道とちがい、舟は流れのある川の上をゆく。流れに身を任せても時は進むが、抗って力のかぎり櫂を漕がねばならないときもある。その櫂を共に握る仲間があれば、越えがたい難所も越えられよう。大学を一艘の舟と想えば、新しい風景が見えてくるかもしれない。（編集子）V

GLOBE Voice
グローブ ヴォイス
2013 Number 8
The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2013年10月発行
発行＝東京外国語大学
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
総務企画課広報係

編集＝広報マネジメント室
編集協力＝日経BPコンサルティング
印刷＝大丸グラフィックス

アートディレクション＝犬飼健二
表紙撮影＝市橋織江
デザイン＝茂谷淑恵（犬飼デザインサイト）

©東京外国語大学2013
本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。